

環境写真記録調査～常緑樹の占める割合～ (2015 年度)

掛下尚一郎(公益財団法人 日本野鳥の会)

調査場所 コナラの林の常緑樹

調査日 2016 年 3 月 16 日

調査開始 1985 年 次年度 継続 終了予定 一年

調査目的

同じ場所から定期的に環境を写真撮影することによって、環境の変化を記録する。今回は、常緑樹の占める割合を解析し、常緑樹の増減をモニタリングする。

調査方法

落葉樹の葉がない季節に遠景写真を撮影し、写真の林全体の面積と常緑樹の面積をプランメーターで測定し、常緑樹の占める割合を計算した。撮影は上郷・森の家のテラスから行った(図 1)。

調査結果・考察

常緑樹の面積の割合は、林全体の面積の約 16.0%であった。2011 年度(約 15.3%)と比較するとほとんど変化は見られなかった。ゆっくりと極相へ遷移しているものと考えられる。今後も同じ地点から撮影することで、常緑樹の増減のモニタリングを行う。

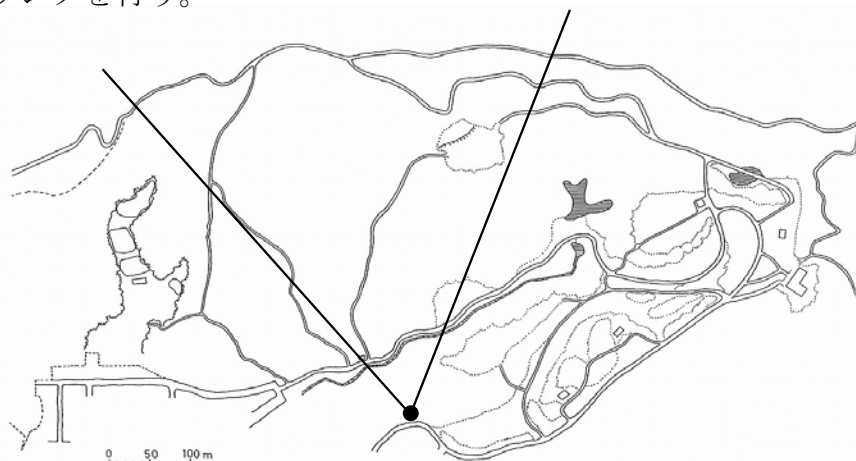


図 1. 写真撮影地点



2016年3月撮影



2011年3月撮影

希少植物調査 ～シラン原生地の選択的除草の効果～ (2015 年度)																																												
掛下尚一郎(公益財団法人 日本野鳥の会)																																												
調査場所 ウグイスの道 5～6 の間の階段をはさんだ両側 (南側・北側)																																												
調査日 (過年度も含む) : 2003 年 5 月 8 日・9 日、2004 年 5 月 13 日・14 日、 2005 年 5 月 12 日・13 日、2006 年 5 月 10 日・11 日 2007 年 5 月 16 日・17 日、2008 年 5 月 16 日・17 日 2009 年 5 月 22 日、2010 年 6 月 3 日、2011 年 5 月 31 日、 2012 年 6 月 10 日・21 日・30 日・7 月 3 日 2013 年 6 月 16 日・29 日・2014 年 6 月 28 日・2015 年 5 月 30 日																																												
調査開始	1999 年	次年度 継続 終了予定 一年																																										
調査目的 シランは、日あたりのよい湿った草地や斜面に生えるラン科の多年性草本である。環境省第 4 次レッドリスト(2012)では準絶滅危惧種(NT)、神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006(高桑他編 2006)では絶滅危惧 IB 類、横浜の植物(横浜植物会 2003)のレッドカテゴリでは絶滅寸前種(En-A)に位置づけられており、県内では数箇所しか原生地が確認されていない。横浜自然観察の森にある原生地では、夏もしくは冬に除草を行い、管理の効果を調べてきた(調査報告 2000、2001、2002、2003、2004、2005、2006、2007、2008、2009、2010、2011、2012、2013、2014)。2003 年度から 2008 年度までの 6 年間は、毎年 5 月に横浜雙葉中学校 2 年生の生徒が、総合学習の一環で、シラン以外の植物(主にススキなどのイネ科の高茎草本)をハサミで切って管理していた。2009 年度からは、レンジャーにより管理作業を行っている。この作業の際には、シランの株の踏みつけが必然的に起こってしまう。 そこで、このような管理作業や、踏みつけ等の効果、影響をモニタリングする。																																												
調査方法 50cm×50cm の針金で作成したコドラートを、シラン原生地にランダムに置き、その中の、花茎のついていないシランの株と、花茎のついていない株を数えた。調査はレンジャーが行った。各年の調査コドラート(方形区)数は、2003 年の北側を除けば、20ヶ所以上に設定した(表 1)。		表1: 各年の調査コドラート数 <table border="1"> <thead> <tr> <th>年</th> <th>南側</th> <th>北側</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>2003</td><td>22</td><td>12</td></tr> <tr><td>2004</td><td>29</td><td>34</td></tr> <tr><td>2005</td><td>24</td><td>24</td></tr> <tr><td>2006</td><td>27</td><td>32</td></tr> <tr><td>2007</td><td>35</td><td>34</td></tr> <tr><td>2008</td><td>20</td><td>34</td></tr> <tr><td>2009</td><td>35</td><td>30</td></tr> <tr><td>2010</td><td>30</td><td>25</td></tr> <tr><td>2011</td><td>20</td><td>20</td></tr> <tr><td>2012</td><td>20</td><td>22</td></tr> <tr><td>2013</td><td>26</td><td>26</td></tr> <tr><td>2014</td><td>21</td><td>20</td></tr> <tr><td>2015</td><td>20</td><td>20</td></tr> </tbody> </table>	年	南側	北側	2003	22	12	2004	29	34	2005	24	24	2006	27	32	2007	35	34	2008	20	34	2009	35	30	2010	30	25	2011	20	20	2012	20	22	2013	26	26	2014	21	20	2015	20	20
年	南側	北側																																										
2003	22	12																																										
2004	29	34																																										
2005	24	24																																										
2006	27	32																																										
2007	35	34																																										
2008	20	34																																										
2009	35	30																																										
2010	30	25																																										
2011	20	20																																										
2012	20	22																																										
2013	26	26																																										
2014	21	20																																										
2015	20	20																																										

調査結果

1) 調査地の概要

本年度の調査地、状況は次のとおり。南側は日当たりがよい。面積約 29.3 m²。北側は原生地の半分ほどが林縁のため、日陰の部分がある。面積約 23.2 m²。南側、北側ともに、チガヤなどのイネ科の高茎草本が繁茂している。

2) 株数の年変化 (図 1)

北側では、シランの株数は 2005 年に急激な増加が見られたが、以降は大きな増減はなく安定している。2011 年は過去 12 年分の平均値 (以後平均値と記す) を下回ったが、2015 年は増加に転じ、平均値以上の株数を維持している。

南側では、2008 年に大きく減少したものの、2009 年と 2011 年に急激な増加が見られた。2012 年には再び大きく減少したものの、そこからは微増傾向にあり平均値以上の株数で推移している。

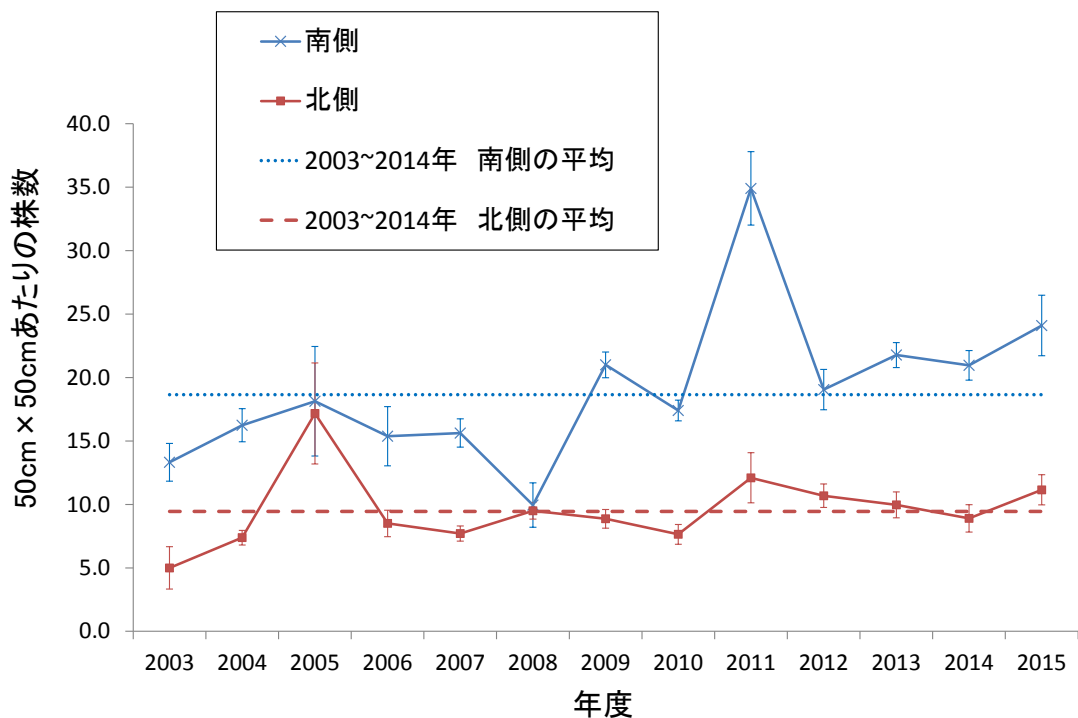


図1. シランの株数の年変化 (グラフの縦棒は標準誤差)

3) 花茎のある株の割合

シランは 1 株につき 1 本の花茎がつくが、栄養状態等により花茎がつかない株も存在する。そこで、50cm×50cm のコドラートあたりの株数と花茎のある株数を数え、その割合を求めた (図 2)。

花茎のある株数の割合は、中学生が管理を始めた 2003 年から 2011 年まで、南側が北側を上回る割合を示していたが、2012 年に初めて逆転した。しかし、2013 年以降は再び南側が北側を上回っている。

北側では、2005 年に大きく減少し、2011 年から 2012 年にかけて急激に増加した。以降は増減を繰り返しながら平均値より高い割合で推移してきたが、2015

年は前年に比べ減少し平均値を下回った。

南側では、3年に一度大きく減少する傾向が見られ、3年めの2015年度は前年に比べ大きく減少し平均値を下回った。

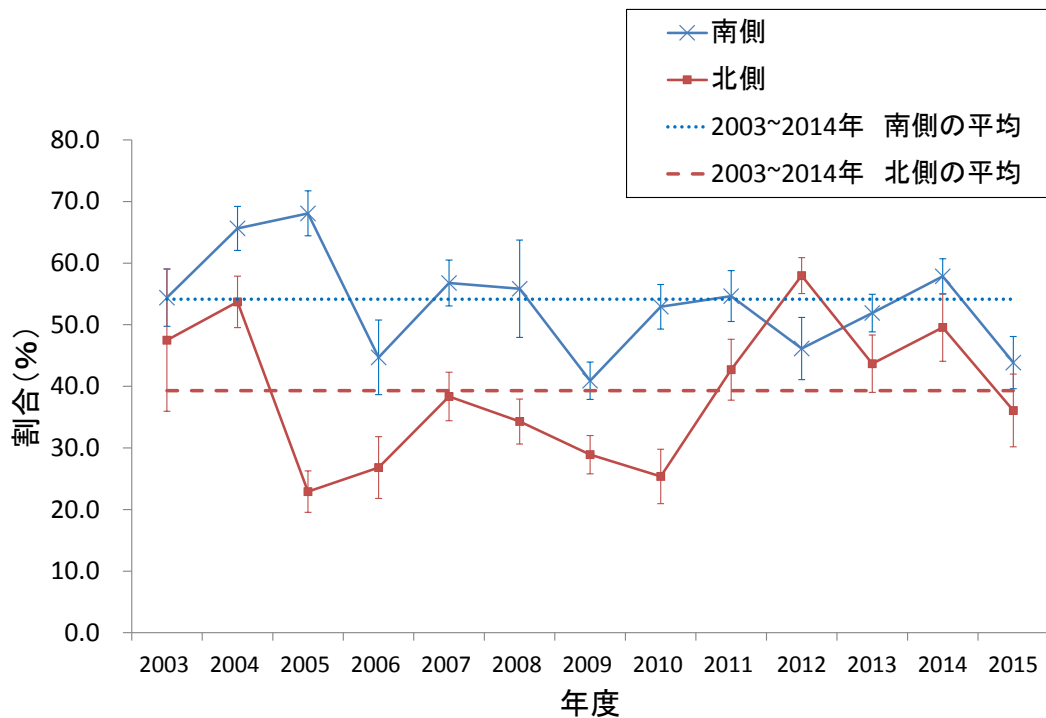


図2. シランの花茎のある株の割合の年変化（グラフの縦棒は標準誤差）

4) 株数の推定

それぞれの生育地の面積を目測し、コドラートの面積 0.25 m^2 あたりの平均株数を乗じて生育株数を推定した。

南側は 0.25 m^2 あたりの平均株数は24.1で、生育面積は計測の結果、 29.3 m^2 と見積もられたので、約2824株と推定された。また北側は 0.25 m^2 あたり平均株数は11.2、生育面積 23.2 m^2 と計測されたので、約1039株と推定された。これらから、シラン原生地には3,800株以上が生育しているものと推定された。

考察

2015年は、北側も南側も株数が増加したものの、花茎の割合は減少している。南側に限っては3年おきに繰り返される大幅な減少のサイクルと一致するため、選択的除草作業(以下、作業)との関係性は一概に示すことはできない。しかし、2014年度の作業実施が2015年3月と遅かったことから、そのことが栄養状態に影響し花茎の割合が減少したとも考えられる。今年度は調査時に作業を実施したためその効果がどのように現れるか引き続きモニタリングする必要がある。

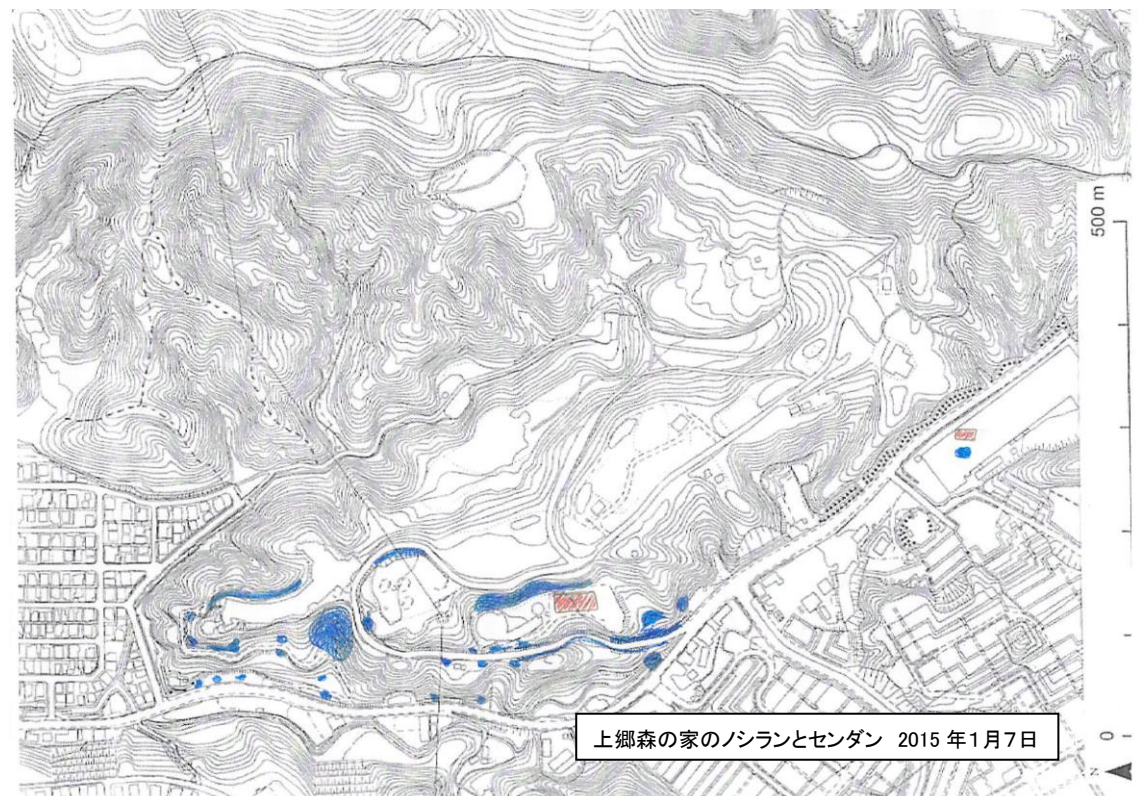
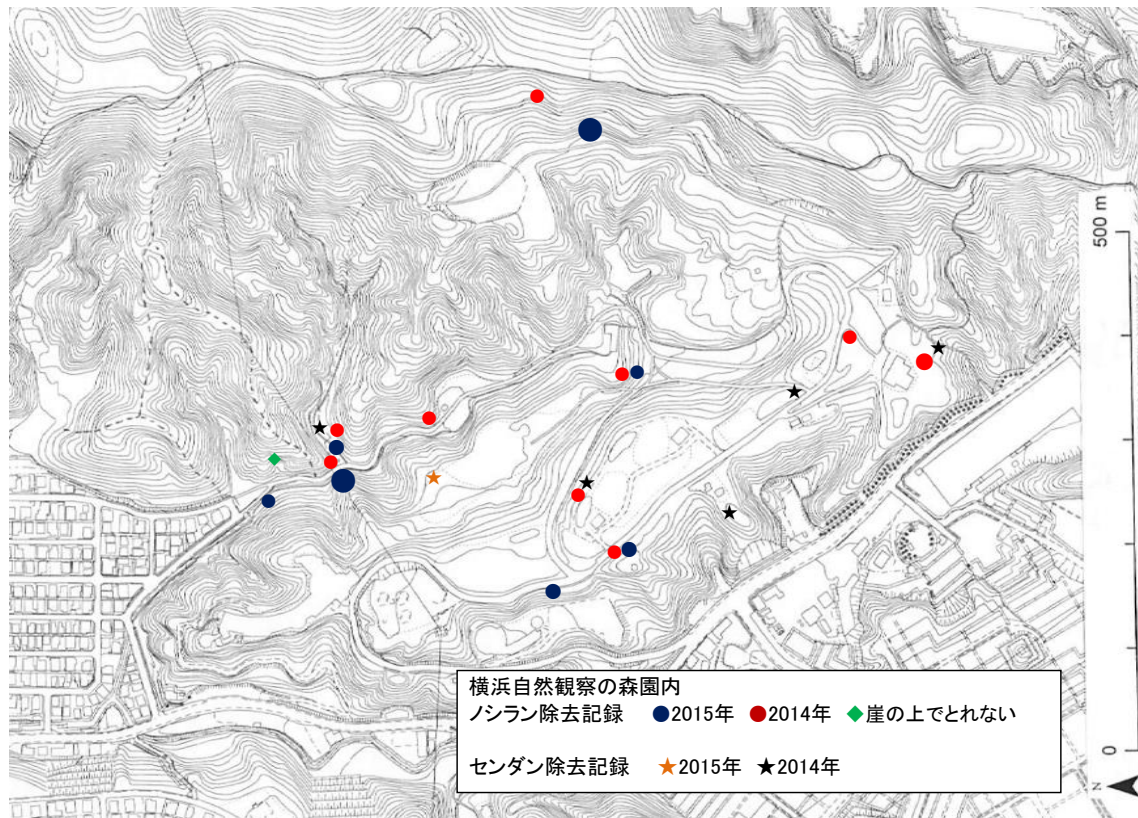
謝辞

本調査及び作業にはレンジャー体験実習の実習生として、植木陽子さん・佐々木美雪さん・新倉夏美さんの協力を頂いた。ここに厚く御礼申し上げます。

「野草の調査と保護」が除去した植物(2015年度)		
篠原由紀子・上原明子・高橋百香・佐々木美雪・八田文子・山路智恵子 (横浜自然観察の森友の会 野草の調査と保護)		
調査場所 横浜自然観察の森園内		
調査日 2015年4月1日～2016年3月31日		
調査開始	2002年	次年度 継続 終了予定 一年
調査目的 園内で見つけて除去した園芸種・外来種の記録を残す。		
調査方法 除去した時、花暦と活動報告に記録した。		
調査結果		
種名	除去した月	場所
アキグミ	通年	園内
アキニレ	通年	園内
アメリカスミレサイシン	4月	ゲンジボタルの谷
アレチヌスビトハギ	9月	園内
アワコガネギク	12月	生態園
オオアラセイトウ	4月	長倉口
イタビカズラ	通年	生態園
オオバグミ	通年	園内
オオブタクサ	10月	野外トイレ横草地
オカメザサ	通年	園内
オニグルミ	5月	生態園
オニユリ	4月7月	ウグイスの道 9
オモト	12月	園内
キショウブ	4月7月	ヘイケボタルの湿地
キダチコンギク	10月11月	モンキチョウの広場
キツタ	通年	生態園、保護囲いの中
コバンソウ	4,5,6,8,3月	霊園口、野外トイレ横草地
シャガ	通年	園内
シュロ実生	通年	園内
シラー	4月	ミズキの道12-13、長倉口
シロバナタンポポ	4月	コナラの道 6、アキアカネ上の丘、ノギクの広場
シンテツポウユリ	11月	生態園、モンキチョウの広場
スイセン	4月2月	長倉口、霊園口
セイタカアワダチソウ	通年	園内
セキショウ	通年	園内
センダン	10月	クヌギの林

タチバナモドキ(ヒラカンサ)	11月	園内
ツボミオオバコ	6月	アキアカネ下の広場
テイカカズラ	通年	生態園
トレニア	10月	長倉口
ナガミヒナゲシ	4月	タンポポの道 10-11
ナツミカン	2月	カシの森
ナワシログミ	通年	園内
ニシキギ	通年	園内
ノシラン	通年	園内
ハナニラ	4月11月	長倉口
ハマヒサカキ	通年	園内
ヒガンバナ	4月	コンポスト、霊園口階段
ヒメコバンソウ	5月	園内
ヒメヒオウギスイセン	5月8月	ミズスマシの池
ヒメリュウキンカ	3月	ヘイケボタルの湿地
ブタナ	通年	園内
ヘラオオバコ	通年	園内
ホソバオオアマナ	4月	コナラの道 5-6、8-9
マテバシイ	5月	コナラの道 19-20
マメグンバイナズナ	6月7月	野外トイレ横草地
マルバアメリカアサガオ	10月	長倉口
マンリョウ	通年	園内
ミツバアケビ	通年	生態園
ミヤコザサ	通年	生態園
ムスカリ	4月6月	霊園口階段
メキシコマンネングサ	5月2月	生態園、タンポポ10、ピクニック広場塀際
ユウゲショウ	6月	野外トイレ横草地

2016年3月 保全管理懇談会に提出した資料



自然情報収集調査 (2015 年度)	
藤村 啓(公益財団法人 日本野鳥の会)・来園者・ ボランティア・レンジャーなど職員	
調査場所	横浜自然観察の森園内全域
調査日	2015 年度通年
調査開始	1986 年 次年度 継続 終了予定 一年

調査目的

自然・生物の情報を収集し、自然解説・行事、一般来園者へのサービスとして活用する。また、生物リストや生物暦等の自然史資料を作成する際の資料とする。

調査方法

来園者、レンジャーなど職員、ボランティアの確認した生物の情報を収集する。情報は、記入者・確認年月日・分類（種類）・種名・確認地点・生きものの行動・写真かイラストを所定のカード（図 1）に明記する。また、鳥類の記録に関しては上記の項目以外に天気・確認時間・環境・性令数などを追記したものの（図 2）を別途使用する。これらの情報は月別に、綱別にまとめる。

調査結果：

2015 年度は、全体で 1721 件の情報提供があった。提供されたカードは、展示コーナー「森のにぎわい掲示板」の自然情報ボードに最新情報として展示した。展示期間終了後はファイリングし閲覧用に設置した。また、情報は電子データ化し、2015 年度版自然情報集を作成して、閲覧できるようにした。（資料参照）

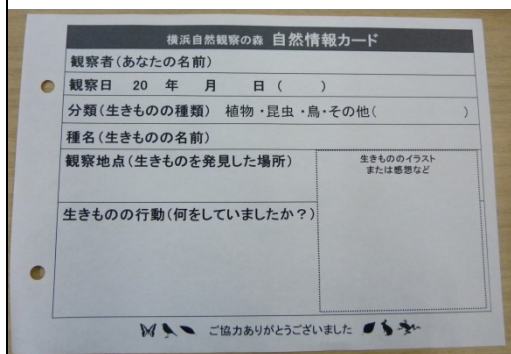


図 1. 自然情報カード

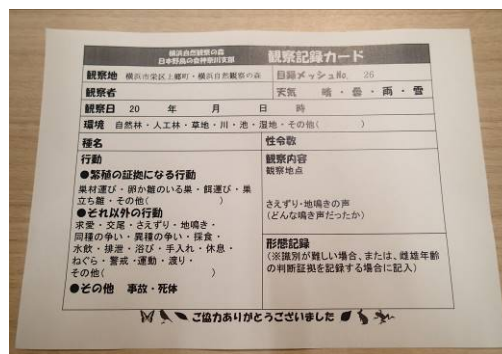


図 2. 観察記録カード(鳥類用)

横浜自然観察の森 友の会 会員動向調査	
山口博一(横浜自然観察の森友の会)	
調査場所	横浜自然観察の森
調査日	2015年 3月 ～ 2016年 3月
調査開始	1986 年 次年度 継続 終了予定 ー 年
調査目的	
「横浜自然観察の森 友の会」の会員動向を把握し、施設運営及び事業、活動を推進していく上での基礎資料とする	
調査方法	
会員名簿管理担当理事より氏名等個人情報を削除した会員データの提供を受け、そのデータをもとに「会員数の変化」「入会年度別会員数」「会員年齢分布」「入会会員内訳」「入会のきっかけ」の5項目についてデータを分析し、まとめた。	
調査結果	
1) 会員数の変化 (図1) 2015年度の会員数は141名であった。前年度比で1名増加した。	
2) 入会年別会員数 (図2) 2015年度の入会は11名であった。昨年の8名から増加している。入会10年までの継続更新の割合は比較的高い。	
3) 会員年齢分布 (図3) 女性が40代から70代まで平均的に分布しているのに対して、男性は60代・70代・50代・80代の順に多い。	
4) 入会会員内訳 (図4) 女性で10代・30代・40代、男性で30代・50代・60代・70代の入会があった。	
5) 入会のきっかけ (図5) 新会員の入会のきっかけでは、行事(自然案内人講座1件、森ボラ2件、未記入3件)が最も多かった。また、ラジオ・インターネットが1件あった。	

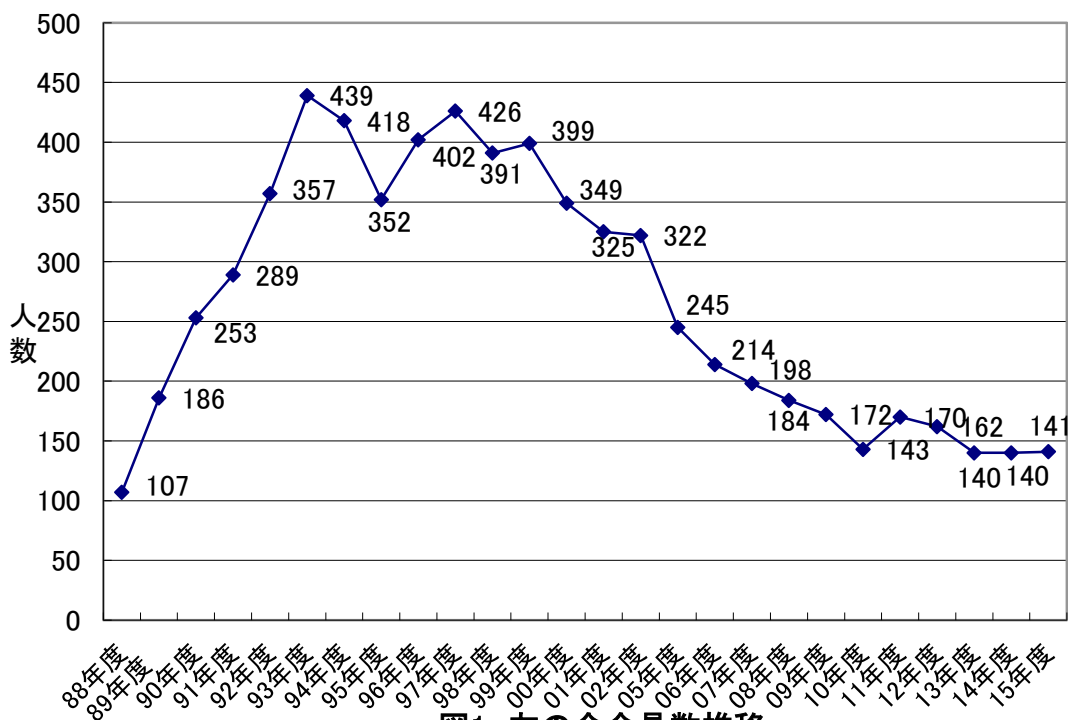


図1. 友の会会員数推移

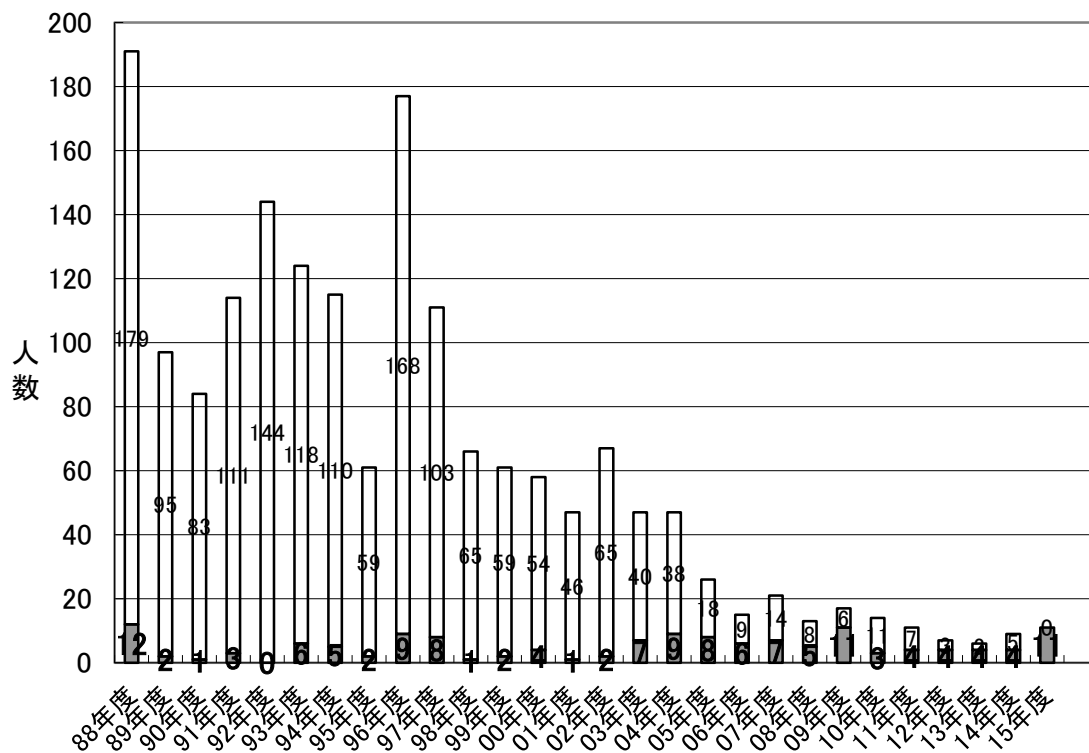


図2. 入会年度別会員数

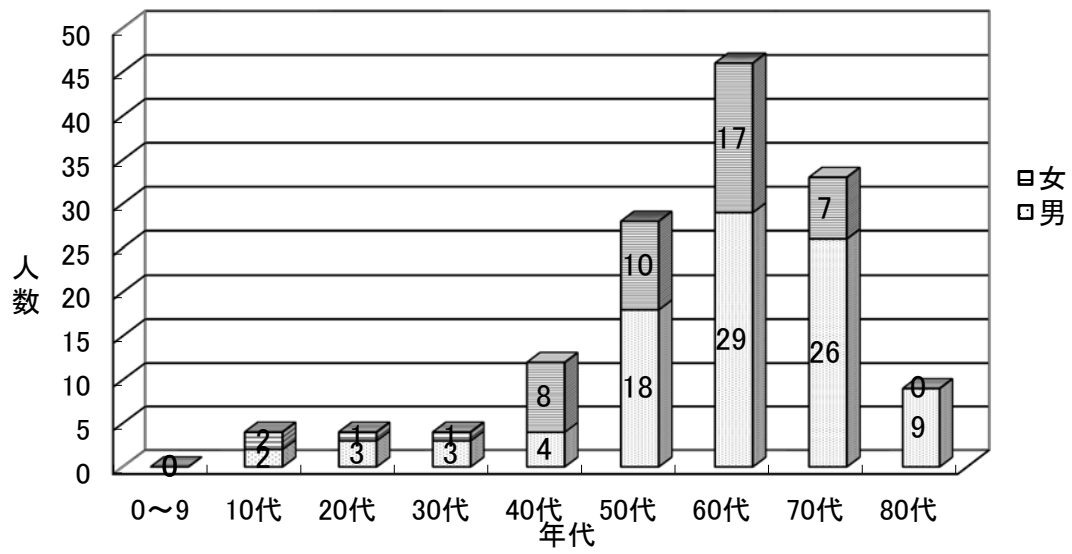


图3. 会员年龄分布

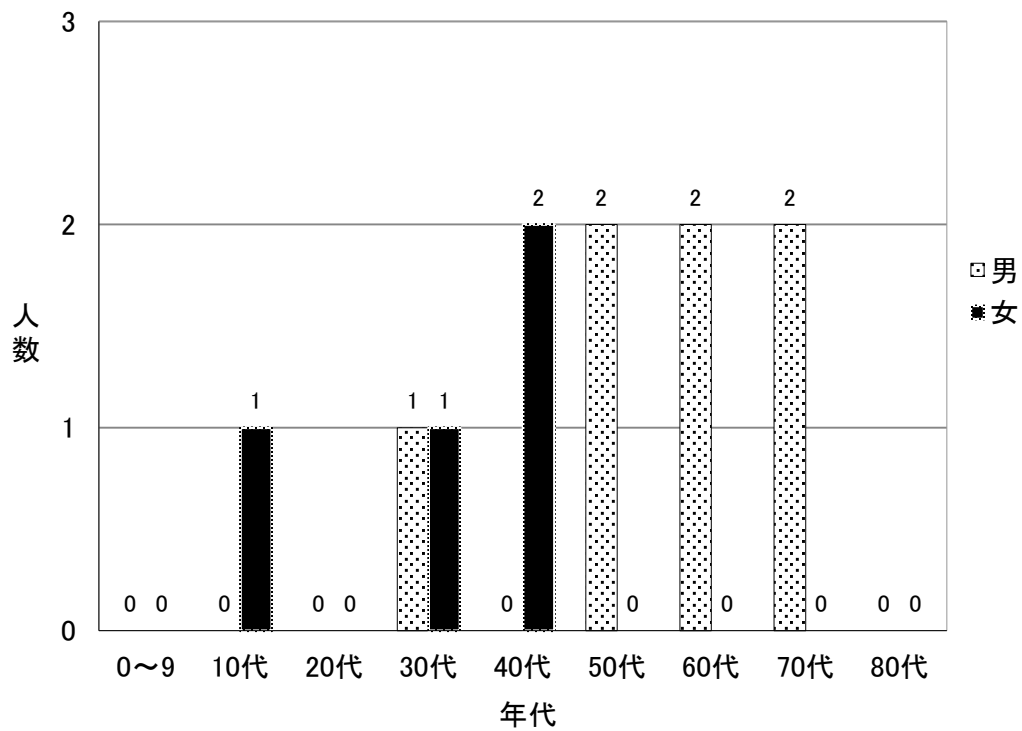
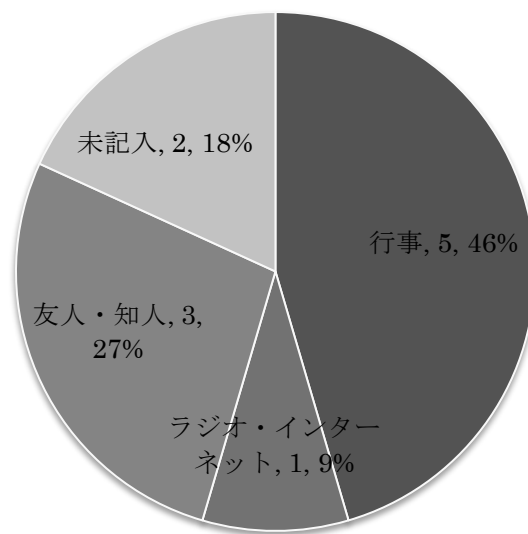


图4. 入会会员内訳



- 【行事内訳】
- ・自然案内人講座 1件
 - ・森ボラ 2件
(複数回答1件含む)
 - ・未記入 3件

図5. 入会のきっかけ

自然観察センター入館者数 (2015 年度)				
掛下尚一郎・古南幸弘 (公益財団法人 日本野鳥の会)				
調査場所 横浜自然観察の森 自然観察センター				
調査日 2015 年 4 月 1 日～2016 年 3 月 31 日 (毎週月曜日と年末年始の休館日を除く。)				
調査開始	1986 年	次年度	継続	終了予定 一年
調査目的				
<p>利用者の動向を把握し、行事、展示、サービスなどをニーズに沿ったものとするための基礎資料として、入館者数をモニタリングする。</p>				
調査方法				
<p>自然観察センターへの入館者数はカウンター内にあるレンジャーが数取機で記録した。ただし、休館日に自然観察センター前に設置したパンフレットラックからガイドマップの持ち出しがあった場合には、持ち出す数を個人利用者数としてカウントした。主催行事の参加者数はレンジャーが、横浜自然観察の森友の会 (以下友の会) の主催行事参加者数は行事を担当した友の会会員が把握し、記録した。友の会会員の活動人数は、友の会の活動報告日報から読みとり、または、友の会プロジェクトの担当レンジャーが記録した。また、友の会活動ではなく、施設の事業の補助等を行ったボランティア人数については、別途レンジャーが記録した。</p> <p>この調査における入館者数は、カウンターにいるレンジャーが確認できた範囲での記録である。問合せや電話に対応している時に、記録できていない入館者もいる。自然観察センターに入館していない来園者数は推定値である。過去の卒業論文研究の結果から、来館者の3倍を総来園者数とした。</p>				
調査結果				
<p>平成 27(2015)年度は、自然観察センターを 309 日間開館した。休館日として、通常の日曜日 (月曜日が休日の場合は翌火曜日)、年末年始に休館した。この期間の利用者の実績は下記のとおりである。</p>				
<p>■自然観察センター利用者数 合計 47,193 人 (前年度 45,489 人 前年度比 103.7%、直近の通常年 2009 年度比 106.9%)</p>				
<p>■入園者数(推定)約 14.1 万人 (入館者数の約3倍)</p>				

■自然観察センター利用者の内訳

入館者数	計	47,193 人	
(内訳)個人利用者	18,201 人	【構成比 38.6%】	(前年度比 104.0%)
団体利用者	23,194 人(439 団体)	【49.1%】	(前年度 102.7 比%)
うちレクチャー実施	125 団体(7,932 人)		
行事参加者	1,261 人(28 回)	【2.7%】	(前年度比 98.6%)
友の会行事参加者	1,173 人	【2.5%】	(前年度比 97.8%)
ボランティア数	計	3,363 人	【7.1%】(前年度比 115.2%)

考察

今年度は前年比で微増の結果となった。自然観察センターの利用者の年度累計は、前年度比では3.7%の増となった。リニューアルオープン前の通常年とした2009年度と比較すると6.9%の増となった。

内訳をみると個人利用者が前年度比4%の増、団体利用者数が2.7%の増となっている。また、ボランティア数が15.2%の増で、活動が活発に行われていたことを反映している。

表 1. 平成 27 (2015) 年度 自然観察センター月別来園者数

平成27 (2015) 年度	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月
入園者数 (推定)	7,569	18,600	19,581	10,089	6,603	14,367
センター利用者数総計	2,523	6,200	6,527	3,363	2,201	4,789
前年同期比 (%)	95.9%	86.7%	128.3%	83.0%	113.3%	111.0%
入館者合計	2,243	5,903	6,246	3,111	1,933	4,544
内訳						
個人利用者	1,779	3,248	1,119	757	1,170	1,448
団体利用者	313	2,514	4,329	2,238	628	2,988
(団体数)	12	47	63	38	20	46
(対応団体数)	4	18	24	19	4	11
行事参加者	17	25	625	43	49	31
友の会行事参加者	134	116	173	73	86	77
ボランティア合計	280	297	281	252	268	245
内訳						
友の会ボランティア	272	270	253	226	243	226
施設ボランティア	8	27	28	26	25	19
センター利用者数累計						
2015年度累計	2,523	8,723	15,250	18,613	20,814	25,603
前年同期比 (%)	95.9%	89.2%	102.6%	98.4%	99.8%	101.7%
開園累計	1,165,284	1,171,484	1,178,011	1,181,374	1,183,575	1,188,364
2009 年度比						
センター利用者総計	77.3%	118.3%	134.9%	85.4%	100.0%	114.7%
センター利用者累計	77.3%	102.6%	114.3%	107.7%	106.8%	108.2%

平成27（2015）年度		10月	11月	12月	1月	2月	3月	年度合計
入園者数（推定）		18,363	15,834	11,061	5,802	5,874	7,836	141,579
センター利用者数総計		6,121	5,278	3,687	1,934	1,958	2,612	47,193
前年同期比（%）		149.4%	104.7%	95.3%	81.0%	75.4%	112.3%	103.7%
入館者合計		5,816	4,998	3,388	1,629	1,691	2,327	43,829
内訳	個人利用者	1,980	1,787	1,214	1,258	1,142	1,299	18,201
	団体利用者	3,485	2,989	2,100	234	469	907	23,194
	（団体数）	64	53	46	9	18	23	439
	（対応団体数）	22	11	6	0	2	4	125
	行事参加者	244	131	28	28	40	0	1,261
	友の会行事参加者	107	91	46	109	40	121	1,173
ボランティア合計		305	280	299	305	267	285	3,364
内訳	友の会ボランティア	291	259	280	247	243	272	3,082
	施設ボランティア	14	21	19	58	24	13	282
センター利用者数累計								
2015年度累計		31,724	37,002	40,689	42,623	44,581	47,193	47,193
前年同期比（%）		108.4%	107.8%	106.6%	105.1%	103.3%	103.7%	103.7%
開園累計		1,194,485	1,199,763	1,203,450	1,205,384	1,207,342	1,209,954	1,209,954
2009年度比	センター利用者総計	109.9%	144.2%	99.3%	69.8%	77.5%	115.8%	106.9%
	センター利用者累計	108.5%	112.5%	111.2%	108.3%	106.4%	106.9%	

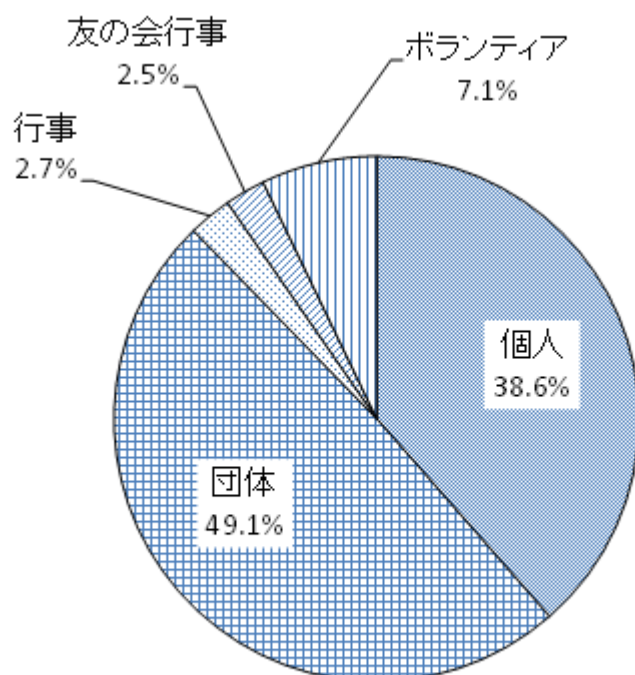


図1 平成27（2015）年度のセンター利用者数の内訳

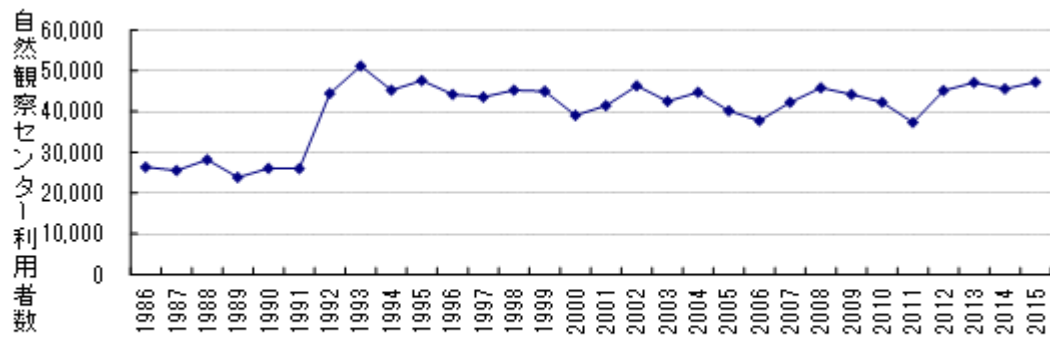


図2 開園以来の年度別来園者数の推移

トレイルランニング大会におけるすれ違い・追い越しの状況				
古南幸弘・掛下尚一郎(公益財団法人 日本野鳥の会)				
調査場所 コナラの道				
調査日 2016年2月27日				
調査開始	2015年	次年度	継続	終了予定
				— 年
調査目的				
<p>林道、登山道、ハイキングコースなど未舗装路(トレイル)を走るスポーツであるトレイルランニングは、近年、国内において人気が高まると共に、ランナーのマナーや、ハイカーや登山者との間のトラブルが問題となり始めており(葛西 2015)、国立公園においては、多人数で走行時間を競い合いながら狭い歩道を走行することとなるトレイルランニング大会等は、一般利用者の安全で快適な利用環境の確保の妨げとなることが懸念されている(環境省 2015)。当施設を含む円海山周辺緑地でも、個人によるトレイルランニングの利用者が増加する他、トレイルランニングの大会が定期的開催されている一方で、自然観察目的の利用者から、トレイルランニングに対する苦情も出ているのが現状である。</p> <p>このような中で、当施設を含む円海山周辺緑地を会場に含む大会(第6回三浦半島縦断トレイルラン大会)の開催が計画され、園内を200名以上の多数の大会参加者が通過することとなった。この機会に、トレイルランナーの園内における他の利用者への影響を知るため、すれ違い・追い越し時のランナーの行動の実態について把握する目的で、調査を実施した。</p>				
調査方法				
<p>第6回三浦半島縦断トレイルラン大会(主催:NPO野外活動(自然体験)推進事業団、主管:三浦半島縦断トレイルラン大会実行委員会;以下、「大会」)が行われた機会に、大会参加者が通過する下記の時間帯に、ランナーの行動を目視観察により記録した。観察は歩行しながら行い、観察者自身が歩行者となって、すれ違いや追い越しの対象となるようにした。</p> <p>日時 2016年2月27日 11:00~15:00</p> <p>観察場所 円海山ハイキングコースのうち、横浜自然観察の森の敷地となっている大丸山登山口~コナラの道 11~18~市境広場の区間</p> <p>観察者 レンジャー 古南幸弘、掛下尚一郎</p> <p>観察対象とした行動は、大会参加者が歩行者とすれ違い、あるいは追い越す際に、</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 走るスピードを緩めて歩くまたは立ち止まるか、そのまま走っているか (2) 歩行者に挨拶等の声掛けを行っているか否か <p>を区別し、それぞれの行動をとっている人数を記録した。また、大会参加者以外のラン</p>				

ナー（ゼッケンをつけていないランナー）がいた場合には、これを区別して、上記(1)のみを記録した。

大会は、三浦海岸を起点とし、港南台榎戸公園を終点とする44kmのコースで行われた。コース全体の概要は次のとおりであった（NPO野外活動(自然体験)推進事業団 2015）。

三浦海岸→津久井浜→三浦富士→武山→光の丘→山科台→大楠山→不動橋→塚山公園→港ヶ丘公園→船越3丁目→鷹取山→六浦→熊野神社裏→朝比奈バス停→市境広場→いっしんどう広場→港南台榎戸公園

なお、同大会の実施要項では、「ハイカー等への早めの声掛けと挨拶、横を通る時は充分間隔を置き声を掛けゆっくり通過を厳守、違反者は失格。」とされていた。

調査結果

調査結果は表に示した通り。調査時間中に、大会参加者241名が調査区間を通過し、またそれ以外のランナーは25名が通過した。大会参加者のうち、歩行者とのすれ違い・追い越し時に、走らずかつ歩行者に声掛けをした人は、35.3%に留まり、64.7%は無言か、走ったままだった。後者は、実施要項上はほとんどが失格となる行為と思われる。

なお、大会参加者以外のランナーで、すれ違い・追い越し時に走っていた人は、82.4%にも及んだ。これは大会参加者が55.6%であったのに比べてかなり大きな割合であった。

なお今回観察した中で、歩行者との身体接触等による負傷事故になった事例は見られなかった。

表 三浦半島縦断トレイルラン大会参加者の行動

利用者類型	ハイカーとのすれ違い、追越し時の行動	11:00～12:45	12:45～14:00	14:00～15:00	(12:45～15:00計)	小計	割合	行動類型	合計人数	割合
ランナー 大会参加者	(総人数)	23	150	68	218	241				
	歩く、挨拶有	4	45	36	81	85	35.3%	歩く	107	44.4%
	歩く、挨拶無	1	15	6	21	22	9.1%	走る	134	55.6%
	走る、挨拶有	11	45	10	55	66	27.4%	挨拶有	151	62.7%
	走る、挨拶無	7	45	16	61	68	28.2%	挨拶無	90	37.3%
ランナー 参加者外		9	—	—	25	34				
	歩く	1	—	—	5	6	17.6%	歩く	6	17.6%
	走る	8	—	—	20	28	82.4%	走る	28	82.4%
ランナー合計		32	—	—	243	275	52.3%			
ハイカー		115	—	—	136	251	47.7%			

考察

大会において、歩行者に対して声をかけ、走らないですれ違う、あるいは追い越すといった行動をとった参加者の割合は、実施要項の定めにも関わらず低い割合に留まり、また大会に参加していない一般のランナーでは走らないですれ違う、あるいは追い越す人は2割に満たない状況であった。このままでは、歩行者の安全が脅かされ、あるいは自然観察の目的が全うできなくなる事態が起きても不思議ではないと思われる。

る。

トレイルランニングについては、国立公園や東京都立自然公園ではルール化の検討が進められているが、円海山周辺緑地(横浜つながりの森のコア区域)では議論が始まったばかりである。今後もトレイルランニング大会等の機会に、実態把握を行い、ルール作りの議論に資するデータを蓄積すべきと思われる。

(参考)

三浦半島縦断トレイルラン大会について

(NPO野外活動(自然体験)推進事業団 2015)

主催:NPO野外活動(自然体験)推進事業団

主管:三浦半島縦断トレイルラン大会実行委員会

各回の実施状況:

第1回 2011年2月19日(土)

第2回 2012年2月18日(土)

第3回 2013年2月16日(土) 天園ハイキングコースに競い合う競技(トレイルラン)を実施させることでハイカーに対するリスクが増大するので止めるよう市民からの申し出があり、今までのランナーのマナー違反等と相まって、鎌倉市は競い合う競技等には使用を禁止する決定をしたため、十二所から瑞泉寺に向かう登山道入口から天園茶屋までの尾根道の「天園ハイキングコース」区間ではランニングは禁止され、競歩や早足ハイク等何れにせよ歩いて通過することとされた。

第4回 2014年2月14日(土) 大雪のため中止

第5回 2015年2月7日(土) 畠山～乳頭山手前約1kmの区間の地権者(ダイワハウス工業)より、一切の通行を断られたため、コースが再度、変更された。

第6回 2016年2月27日(土) 今回。

引用した本・文献

NPO野外活動(自然体験)推進事業団 2015.三浦半島縦断トレイルラン大会.

http://www.npo-outdoor.com/miura_main.html (2016年8月28日参照)

葛西奈津子 2015.「トレイルランニング」～知恵蔵 2015. (株)朝日新聞出版. 東京都.

環境省自然環境局国立公園課. 2015. 国立公園内におけるトレイルランニング大会等の取扱いについて(平成27年3月31日 各地方環境事務所長宛て 国立公園課長通知).

東京都環境局 2015. 東京都自然公園利用ルール.